



平家物語巻八

特別
リ 5
12969
8



平泉通志卷之八目錄

山門清華

法環

法環^寺院

水嶋台

金山台

法住寺台

那部

太事府落

猫馬

漸尾院

被判





手宛物類書中ハ

永正二年七月廿四日の長中つらと法皇を擁
 奉使大御之資おつし子息右馬頭資時計所
 汚儀にてひううふ汚承を下させぬて鞍馬
 為汚幸なりち信ともあまをなを都らうう
 てわううひなんち中たれいあううて藤
 代崇業王坂なとつふありーを演義を志の
 う勢ぬと横川の龜尾^{ケウビ}苔森場坊へつを
 ます大流記して本塔へうう汚奇なるへけ
 進と申け進と申塔此苗苔垂^{チリ}垢垢汚承なり

かりり〜〜〜〜し流流之流土も皆因難坊
 とる権志をふ流皇を仙洞を出て三山へ
 之上を鳳あら閣を去て西海へ指放波を崇高野の
 行くところや女院まらや八幡宮後咲滅ウツミ左赤
 西山東山れわ〜〜け〜〜里まほわてみき〜
 まさ芳のひきり平家をむらぬ建と徳氏を
 つ〜〜入かつ〜〜をす〜〜の東をゆ〜〜なき
 里とそかなりよらるカイ昇昇陣陣よりまひ来りやうの
 ことある〜〜しと〜〜むほく〜〜至徳太子の末
 来れたる色ぢふの〜〜と〜〜うゆ〜〜〜れさる

ほと子法皇こそ山よま〜〜里めふとま〜
 ー〜と〜〜を事りぬふ〜〜うた〜〜れ法れ入るぬ
 とらお美白松波南波とらま法教太政大臣
 左大臣大臣大臣大臣大臣大臣大臣大臣
 三位又位の殿上人を人てむよ人とかう人
 られ友か階は望をりあ〜〜帯取職を帯とる
 ほとの人れ一人も〜〜路〜〜やたりの里たりあ
 難房もさあまるよ人事りつやひ堂上堂下
 門外門内山下〜〜もなるそみり〜〜た
 か山の懸昌門池池の面目と〜〜う〜〜く〜〜らと

も建同廿八日流旨部へ還^ル流^キなる本曾立美
節^ノ評^テ留^リ護^ニ有^ル近^江源^氏山^本冠^者並^高
白^旗さ^りく^先件^ノ供^奉と^の廿^節逢^々
さ^りと^流る^白旗^此々^不始^てさ^や六^への^流め
川^らり^の見^相なり^さる^かと^に十^席花
人^の亂^敷十^席下^等治^橋を^まり^てさ^や六
色^の十^席奥^新判^友勢^席の^子矢^田判^友代^表
清^大江^山を^つく^上流^を又^振津^田河^内の^流
矢^亦同^いく^て同^一部^へさ^さり^る凡^京
中^一を^源氏^此せ^いみ^りく^たり^勢勢^中

か^テ路^中一^綱を^強房^の換^地邊^候利^南左^米門
將^夷家^院の^没上^の箋^{より}ひ^て勢^仲勢^家頭
の^下本^曾や^赤地^の緩^乃並^悉に^唐緩^城の^鐘
三^ヶの^りもの^化と^れ太^刀と^も此^サ同^い
く^るま^らふ^の夫^をひ^添藤^乃弓^脇に^けさ^み
甲^をい^ぬいて^片の^紋より^きひ^きら^ついて
う^ひひ^げる^十席^花人^の亂^敷を^緋地^の緩^の並
糸^小繩^城の^鐘と^も全^地の^太刀^とも^此サ^同
市^のさ^か大^中一^足乃^矢負^盛勢^藤乃^弓脇^の
け^さみ^あれ^も甲^をい^ぬいて^うの^ひも^も然

置てその山にけりか肉大臣宗威公を母と
て平亂の一獲少を返討す人まより作ら
さかある處上よりこまら承て吾輩取
天中と養費に本當を大徳大丈成忠の着取
六条西洞院を下さう十歳養人幼氣を仁和
寺殿の南波と申一蓋の所取をそ終りけり
法皇を主上外戚ハ平亂よとくれさせ終り
西海の波たう色小たくりを治ふ治事と
斜たうす治教多て主上并小三種神忌あや
ゆへかうまふへつるしを新へさう一西

園へ作下さきされともま取用をうとま愈
院皇子主上の外三処おし一は一と申すを
二まをしまふけの君より存らんとて平亂
とのをて西園へ落下りぬと口を部おまり
あしき八月又日は法皇は又を連ひのへりを
とあさうせぬひて是三又の又歳り一なるを
ましくけり法皇われをりのりとして作られ
も法皇をみまひさせ終ひてたまふひつ
りさぬふ園とうくして野まひさ
を治ひたりその故にまればか歳り一なるを

清じと地めまゝ清澄されしつりまじりても
女清音よたて下いら勢くく心くれまゝの
人代家よ白い鶏餅十餅つれしその家よを
乃かろるとつふやの何ましとて遊るの
志ありしをすろくくしまたるけるゆへ
ふや山清じすめ王子あつた多生糸くさせ終
まら信隆つも肉くさき思はれけき
ともま家よとたろま下いらをわい文よ色
もくろくをたてなりまら本もなつり
を入さお國れおおハ糸の二位没りく

くろくろるまらつ建そたて下つをてまら
弟の君うーならんとて清めれと館みけを
てめてなりと糸くさをぬひたり曰えとや
二位没乃はでうと清勝寺の終行結香清中
の貴君よくろましくけり終るをわうぬん
よ平亂よまきくまてまをも女房をも京都
よ控えま西國へ落下られらるるの法京
西國より主人を乃ほをみやいさなりひまらさ
てつうまらくこと清くと申のなきられまら
これいお斜なうまらるあひまらやいさおひ

糸くまの酒の七条をそおられらうけり
女房様まうや紀伊守教光あれを袖乃は
てらうひつふうのまは清運をたくひ
むけさ勢給らんすう物をしとらうとく
めをうらまけり次の日う法皇より清運の
車を糸くまらまけるなにも志のあか
ましとや中ねり紀伊守教光を言まは清
めよまらうもまのひととそえくし
とま忠をもたけりうらうけり
むらうう月をくらりくらり或は教光

やや二首れをよみて
たりたり

一巻を思ひ出でなまがとくま
老うれもりの教光のひのし
翁のうりさなをうらま
方はほくくま
主上教光のまをうらま
おほく
のなれとやうてお思義て
られたるをま

ナトラ
同ハ月十日本巻左

馬頭よりなつて新垣國を治ふるもさう包納日
將軍とつふは益をそとさ進ける十歳老人
備後守り成て備後國を治ふるも本當新垣を
ささづつし伊豫をたふ十歳老人備後をささ
つし備後をささふ外徳氏十歳老人益徳撰也
遠使韃靼尉長束封さうなさ進ける月十六
日ありぬ大臣宗盛とさ下平亂一數百六十
人の友藏とささつて攻上り治さるをささ
らさその中より平大畑を町忠つ飛頭信基
撰波中一將町美られ三人をさつられさその

ゆへをささ上并よ之種神忌あやむなう部へ
うアしつれをささつて町忠つれりとい作下さ
まらるふよりつてなり日十七日平亂を撰あ
國三笠郡大森府よりうけさる人兼池原席
高直を就さうと平亂の治はよりひける大
津山乃美ありまきくまつとんとて肥後國よ
うららるるをのささつて城小指こもつてしめあ
えくささつて九州二嶋の治もものともさ
ささつてささつて九州二嶋の治もものともさ
らるる南河を岩戸誌つ大森郡並つるをささひ

けり平家安樂寺よりありていふを運方とて
えけりひつひとふが三位中一なる御心

信なれししあるま都のあひしとを

神もびしし思ひたるとらん

んくまことふあふあふとてみふ袖をそぬ
らさまけり同サ日まやあまを法皇の意命
みそ言え采院教して位はつるをぬふ振政
をりしれ振政を東渡ししらを終りす野屋
飛人なりしをひてんとみふ返かきりれきり
とまのつめれやなとてしりしみ恒悔すれを

りひそなるとまよふく川の日なり國ふ二人
のまなりとてやととも平家の趣行よりあつ
てしう京河合ふ二人の王をまうくしれ
びしう又徳天皇とあ二道八月廿三日卯く
まさせのひのつ子れま進つ位お望をりき
てましくまれしゆくつ初ともありまうし
れつ子惟も親王をし本皇皇子とて中へま
あれま登つてつ心よりあ言海安巻巻中
昭百王理れをつんよりあありま進し賢聖
の名をもとてまうくわへまあやとみ

つりきりしついでに玉つお玉のつとを
なするをむす袂をよそひ書のこととらたりに
なり星のこころにたつなり結つるにあらぬ希
代に勝本一王下の壯親自來心をとらを
月つ書あある列系して心をふきら心を
らさきつる上清初のも信たりつるま疎略
わらんや志濟僧正を本寺に壇を多て惠亮
和尚を大肉の志言院に壇法たてつくつれら
まけりうの志言やうをう發らるとつ小持落
をなさを志濟僧正をう多ゆじいもやお

こころなんと惠亮をう發らるとつ小持落を
なして肝膽を碎つて祈られきり既小十葛
れ競馬くまらぬ好田番を一乃清子惟高親
王苑明くそぬふのらふ葛を二乃ま惟仁親
王苑勝さぬふやつてお撲乃節ある了しと
て一乃清子惟高親をまらうと那那羅志高
束とて凡ふ十人の力ありつるゆる志
ま人をいつさきまら二のま惟仁親をまら
りや善雄が将とせせいちりさうた人
て河女よあふるくとも思ひぬ人清愛恵乃

清器^{ツギ}有りとしやうけてそやうさ進^{マシ}いふるを
ほとよ那部^{ナベ}羅^ラ善雄^{ゼンユウ}うらわひてひくくし
清まとのましや女^メさよと志^シらうきそふ鹿
清のともよ善雄^{ゼンユウ}をさうけ二つうらまそ
なまらうとたうたうかそほそたふねとらう
た又清つやうりさいし急^{イジ}を叫^ヤしてふ鹿^カ
とけしあきじとそふとらうきともよし急^{イジ}を
あきとらうおなまをふきんとまたりひふ
あうぬちらうらうさ進^{マシ}とそなたらう大^{ダイ}れ男^{オト}
うさよまらうらうおあふなうみまも進^{マシ}を

二のまの清母^{セイボ}儀^ギ潔^{ケツ}政^{セイ}吾^ガうらまは使^シくうらま
れあやまらうまけうらまらうまかさなうて清^{セイ}
まきまらう又^{マタ}也^ヤい^イうらまらうと保^ホたれと急^{イジ}亮^{リョウ}
和^ワ者^{シャ}を大^{ダイ}城^{シヨウ}極^{キョク}の法^{ホウ}をばそなまらうらうこ
あひうらうやかりとて獨^{ドク}結^{ケツ}をもつて頭^{カビ}頭^{ダウ}
清^{セイ}ふ破^ハ里^リ腦^{ノウ}をまらう乳^ニま和^ワして護^ゴ摩^マよた
えま^マ娘^{ニョウ}頭^{ダウ}立て一^{ヒト}のみえまらうらうまらうの善^{ゼン}雄^{ユウ}
お撲^{ウチ}よのらうまらう二^ニ又^{マタ}位^イよつうをぬふ清^{セイ}和^ワ
清^{セイ}門^{モン}あまらうらうらうまらう水^{ミヅ}毛^モ夫^フ皇^{ミカド}とも甲^{カウ}天^{テン}
うれらうらうてそ山^{ヤマ}門^{モン}よまらうさうらうのあや

しを直亮をつゑにけし二帝位ニより示
言イさるサを振シしシ菱カシおキ細サ意ニ志ニのふとも
つゝんウらニ通スれモやハ力ヲてモありキ
むレほッをミふヲ昭ト神ノ汚シらラひ
なりトうミくラうケる平家ヲ振ツ思ニてハ
由シと待すメてウと進三ニ文ヲもウ言ハ文ヲもウ
志ヲて落下ル人トもノをシ中ヲあシ進レれル
亦大功ヲ時忠師所らんもヤ高倉文ハ汚シ子
のミやヲ横濱中主秀ノ汚カ殿セる菱をリ
くシをシ如國へ落下リもウ一ヲ木倉孫仲

ウサキヤラカフ

上洛れトもウ進ム一ヲあシとシ進レれル
だテ下リつウとシ一ヲあシみやこハの不川ノらウ
とウ位ヲもウ進ムとシ進レれル
つシらウつウとシ進レれル
なラつウとシ進レれル
中還借レ困王の大つシ吳國もシ進レれル
らん我おもウとシ進レれル
大伴王子トはラうツとシ進レれル
弟野丸おくヘあきおりとシ進レれル
子孫をリてはお小位トは汚のを汚ヒとシ進レれル

孝極る皇と申せしも大業控心をたこさ
ありて清名を流^{ホウ}舞^{マシ}尼と申しうともよ
度位子川^ニ子^ニ極^ニ極^ニ皇と申せし
もつまより下りせし還^{ダシ}後^ノのさやる細
や及つてふとそまひけり同九月三日伊波へ
ふつの勅使をたてし勅使を糸^ニ藤^ニ長^ニ憲^ニと
うさこしと太^ニ上^ニと皇^ニの伊^ニ波^ニへふつの勅使
をまらけく事へ^ニ朱^ニ蔭^ニ白^ニ河^ニ鳥^ニ羽^ニと代^ニ代^ニ殿^ニ記^ニ
わりとやをともい^ニま^ニみ^ニを^ニ清^ニが^ニ鼠^ニの^ニあ^ニたり
清が鼠に後の海をけし地とそ承る事ある

執事と部をさるめ肉意さるる了しとふつ
念後あつしとやと部もつるさるる主上
をうれしる若戸の法師大業極皇の若戸
そましくく人多くの家くを野中田中
つまれし麻^ニ衣^ニやうのねやも十^ニ多^ニ人^ニと
とも規^ニけ^ニ了^ニ肉^ニ意^ニを^ニ山^ニの中^ニな^ニれ^ニる^ニの
本の丸^ニ没^ニも^ニり^ニく^ニや^ニわ^ニり^ニと^ニ申^ニと^ニ申^ニと^ニ傳^ニなる
のつもわりま^ニる^ニと^ニ申^ニと^ニ宇^ニ依^ニえ^ニへ^ニ新^ニ奉^ニなり
大^ニ郡^ニ司^ニ之^ニさ^ニの^ニ若^ニ戸^ニ皇^ニ居^ニり^ニなり^ニ社^ニ殿^ニを^ニ月^ニ
つ^ニ雲^ニ若^ニれ^ニ若^ニ戸^ニ子^ニなり^ニ廻^ニ席^ニを^ニ子^ニ位^ニ六^ニ位^ニの^ニ友

人海よまを^ニ國^ニ徳^ニ為^ルけし^ニそのとも^ニ甲冑^{カウチウ}
弓矢を^ニ帶^シて^ニ書^シ渡^ルの^ニこと^ニく^ニた^ニが^ニを^ニわ^ニら^ニし
少^シり^ニし^ニの^ニを^ニれ^ニ玉^ニ垣^ニふ^ニく^ニひ^ニり^ニを^ニか^ニと^ニを
見^ニえ^ニし^ニ七^ニ日^ニ糸^ニ終^ニの^ニ悔^ニ太^ニ后^ニ没^ニの^ニ汚^ニた^ニあ^ニま^ニ夏
也^ニの^ニ汚^ニも^ニそ^ニあ^ニつ^ニま^ニく^ニ致^ニ汚^ニ辱^ニ敵^ニは^ニ戸^ニを^ニ一^ニ罪
ま^ニゆ^ニく^ニし^ニう^ニを^ニこ^ニり^ニも^ニた^ニら^ニ汚^ニし^ニ急^ニま^ニす
を^ニの^ニ中^ニに^ニれ^ニう^ニさ^ニに^ニを^ニ神^ニを^ニな^ニさ^ニし^ニもの^ニを
な^ニふ^ニれ^ニふ^ニら^ニん^ニあ^ニく^ニろ^ニ汚^ニく^ニし^ニし^ニま
太^ニ后^ニ没^ニう^ニら^ニに^ニや^ニら^ニる^ニこ^ニひ^ニの^ニう^ニら^ニさ^ニし^ニま^ニあ^ニさ^ニ
ま^ニし^ニさ^ニす^ニ

さ^ニら^ニと^ニも^ニせ^ニた^ニら^ニし^ニあ^ニく^ニろ^ニも^ニひ^ニれ^ニ書^ニも
よ^ニり^ニし^ニつ^ニて^ニわ^ニら^ニふ^ニの^ニこ^ニも^ニし^ニう^ニか
と^ニり^ニふ^ニふ^ニ身^ニを^ニい^ニほ^ニう^ニけ^ニよ^ニう^ニと^ニち^ニら^ニさ^ニし^ニひ^ニ終
け^ニら^ニさ^ニて^ニ太^ニ后^ニ有^ニへ^ニ還^ニ幸^ニなら^ニま^ニし^ニ程^ニは^ニ九^ニ月^ニも
十^ニ日^ニあ^ニま^ニら^ニし^ニな^ニり^ニぬ^ニ務^ニの^ニ祭^ニひ^ニを^ニの^ニ持^ニふ^ニ處
む^ニと^ニし^ニ海^ニろ^ニの^ニ船^ニれ^ニう^ニ包^ニか^ニし^ニし^ニを^ニ袖^ニも^ニ志
ほ^ニ連^ニけ^ニく^ニ少^ニも^ニゆ^ニく^ニ秋^ニの^ニあ^ニし^ニれ^ニさ^ニま^ニり^ニの^ニを
り^ニと^ニを^ニひ^ニひ^ニけ^ニく^ニ捨^ニり^ニう^ニう^ニう^ニ志^ニれ^ニひ^ニか^ニし^ニ
者^ニ是^ニ九^ニ月^ニ十^ニ之^ニ夜^ニを^ニる^ニを^ニこ^ニし^ニふ^ニ月^ニな^ニれ^ニとも
その^ニ也^ニを^ニ部^ニを^ニ思^ニひ^ニ出^ニら^ニぢ^ニみ^ニる^ニま^ニ我^ニう^ニう^ニを

ありてさやうなるを九色丸書の人ひき
ひくれば月お思ひをけししたるひもつさ
乃やうにたほして落座ち忠彦

月をみしきまのふらひの友れさや
まやこりしれをおもひつらん

流理大夫隆盛

あひしとよそのころひのうもさう

契りし人の智ひ出られて

シラユコウ ナチツキ
皇名亮隆正

日きしう一聖色丸書ともさうして

ナギキ

おももぬごと月をころるの

野田國を刑部三位頼賢スケの國なりたり

子息頼經の臣を代友よそのまらまらるの

来ふと拍經のりへ平亂を既よ神明の色

くわれをり君の色すせられ下りせて帝

部を出て波乃うるまなくよみ落人となれ

るまのるを九列のものともうけあても

てあつらふらうゆるるら子南國よをひ

てきたるうふへうらそ一味同心して九國

の中を追出さるつるかきひけつこ

とてしつらとされへさき紙紙本三席維新より下紙
まうの維新と申を打うろくま老れまうて
そのひたるたやへんを故園行山里ふある
ひとのひとをひきめをたかりけりのも
とへ男衆をくつよふほくふ年月もりさ
かれも者もたくなつてもたねぬ母を道をお
やしひて母のりへ一通ふ者あつりかなり者
うや問はれりるをもしも道ともつるをなを
とすすしうつひきるあつし物ふりちん時
志願しを修きてみよとそをへけり娘母

をへへお志つりひそあさい海よりたる男の
水多れ猶衣をまゝこまけりるひつそよまら
なごしとつのをた下きとつふものをけき
てアくめりかこをけおつてみねも昔故園
よあてと日白橋橋築とつふたきのすう
ちさながら岩屋のうらつうけなさいりら
女衆をれはよくくまじてまけ道したさい
かなくえしてふらひたれも浮すう多をみ
幸しくんうたつふまうしうこ道まを糸
てさゆつひもつひたれも我らあれ人乃梁

よきあつす海ものをのびくをみくを肝福を
かよふふまふふそもくちりる麻の子を男子
なるアしり夫打袖とつてを九列二嶋は肩
をたふある者あるまふふさうもそ利りる女
のこねてたといひつりならすのあまてそあ
らそあま日こあれよりこいつくうわもる
アまかたく見系さんといひたれを所くつあ
てしし昼のうららうらうらあけし又ふ天記
枕へも十日又丈もあるらんとあがゆふ大
地ろそ幼揺しそらもひかふる女さも醜を

かよそそすのくくくく十餘人れあは
おあふふさきんてあまきさりぬきひりそよさ
すといひひつるよあ大地行くうふ忍うう左
たりけら女ゆてはとなく産を志ふらまをれ
も男子よそそありける母のこの祖父そた
てくみんとそそたてこれあつる十歳よさ
そこさうよせいあがさううかもたりのうと
そそ七歳まで元服せき後母あつ祖父をた
大丈といふ間をさしたとこさうけあらと
けさ夏も冬もさよまはあのくくひふなく破

たるとされをあらうと里大右とらう中けりて故惟
兼を伴の大右もを五代の孫なり町らむら
ろくさるるれす忠なれともや國司の孫
院と号して九列二鶴よ血文を志し里け
まし然れんきそのときを惟兼よりたうひ
はく伴の大地を日向國よあらめりて進めふ
高志尾の神祇なりとそ承るるるが
とふ平家や執事よ都張りて其内裏に
ふししとて心合後らりしとて惟兼の孫
叛とておがまににおる進まらうの進まらうと新

タヤイフヲチ

中一細き知感の英見よ中さ進げらるの
志者三歳を小松汝れ許亂人なり志し進ま
忠連清一取ひのをもをなひてあらうて清
鏡きり子やもや山らんち中さ進め進を
は儀しとれんしとて新三位中一将賢感も
勢又百餘語を故國よりりあらうてくは
あいらんまとも惟兼志しひをうと
忠連をも進まらうと進まらうと進まらうと
大志し中れ小事なり又とるあらうてを
とをなにかとれしとらうと進まらうと進まらうと

り包らぎぬて清一雨てりのまをなくとぬ
ててて延也くまらまのら権業り次男が成
次弟惟村を使者とて太宰府へ申参りて平
亂しう主君の君とてましくく人を甲をぬ
きりた強をこのつく人よまらるるく人
とも一院の作もますまやりの九國れ肉を
延つしをふつふかふしゆや申をくけい
けきを平大細之時忠師業くとの重業と之
かう志して惟村よかひのけてまひけるを
丈我君も天孫四十九をの正統神武天皇よ

の一人皇八十一代よあつらをぬふさねてそ
昭古神正八幡まもりの三つをくまもり
ふつしうさね流ふらぬ枕中一箇家を保元平
治よりそののつたてた延記をくつめ九
列代君ともまきみかうりさ備へしうめさ
ましう延るまうれ君をわすれて東國水國
乃高流水新給兼仲ふ小町くらしま志抄が
さくくを國を新らんをたらんち申をま
しう思ひてその鼻巻後の下志よ流小奉
しう延新くしうねやうめさまひける巻後

國司刑部ツ刑資ツをさしめて曩ノ大さふ
つげキやうやうキをさすハひけキなれハ惟
村ゆて父ス一ハけキらハれキを
つふハびハるハつハをハそのハ義ハなるハ九
國乃ハうハらハをハ長ハ出ハしハてハ遊ハろハふハか
とハさハこハしハしハ徳ハ大ハ吏ハ判ハ友ハ季ハ貞ハ持ハ津ハ判ハ官ハ
尚ハ澄ハ白ハ後ハ信ハ孝ハのハ一ハのハ幸ハ怪ハよハいハつハとハらハいハ
らんハとハしハうハれハせいハとハ十ハ餘ハ流ハ流ハ統ハ恒ハ國ハはハ打ハ新ハ
高ハ野ハ本ハ庄ハ小ハ懸ハ白ハ一ハ日ハ一ハ夜ハ夷ハたハくハつハ
さハまハとハもハ維ハ新ハのハ本ハのハ破ハるハ雲ハ霞ハ乃ハこハとハらハに

りハさハかハれハしハちハらハらハ及ハつハてハ引ハ延ハをハ平ハ亂ハをハ統ハ
本ハ三ハ席ハ維ハ新ハのハ三ハ美ハ館ハ新ハのハせいハらハくハとハらハいハ
よハすハとハさハこハしハしハやハらハらハのハもハとハらハあハらハ
中ハ古ハ来ハ有ハをハしハうハ落ハ流ハくハらハとハらハのハもハしハのハ
里ハ所ハらハをハ満ハとハ神ハのハ信ハ連ハのハあハらハ里ハ張ハ心ハほハらハ
くハもハたハちハまハのハれハをハ興ハ丁ハもハなハきハまハしハ葱ハ花ハ鳳ハ
輦ハをハ只ハ名ハをハ新ハとハすハてハまハしハ勝ハ興ハよハめハとハまハきハ
里ハ國ハ母ハをハけハしハ地ハふハしハをハてハやハんハ中ハなハらハ女ハ房ハ
をハをハ濟ハのハすハうハ流ハ序ハのハをハとハらハ大ハ臣ハ汲ハ以下ハのハ
心ハおハ言ハあハやハこハめハあハれハそハもハ新ハたハりハくハけハさハ

みのらもして水幾の戸にいてく我さ記
よくと弟崎の津へとう着居人切らう
もらる車軸のこく一吹風いさこをわくと
りやおつ子海もらめ先つゝていついまもみ
えさりきりし恒吉おされ馬推宗津浦おれま
上たろ舊部の巻巻とれまを初られけらた
頭見山うつゝ候なとつふけもくき讀難
凌う勢のひて潮こくら平沙つう部へま
ふりつなうくく一乃津あやなれを津是うら
出ら血をりまこをうめくまなひれもらうま

を文をまろく白袴あすうぬらうなわよけり
姑玄特三花丸流沙葱蕨を凌うまらうま
らうらみもまらやりのてうまさうつゝかそ
まを求流のためなれも自地の利益もあり
らん是を團我のまなまらまをのらうら
とねりらうらうらまら魚田大吏津並を
二十名請てをくまらまら池系う山實共
次書書教子請て申宛入津並まららら
津並書意以外ふ不和なりれら津並を
らまらんとてまらうららら津並をらら

りふねを過さず安ぬふる色を部よりし物
の福慮へのよひに時あさ夕みおれし里の
るなれしといはるの里よりもなりし
見つけらるる表をそのよかき進ける新羅百
濟サイ藤英丹雲ライケイのこて海乃果まて之落ゆの
ちやとそとつ進なれとも波風じりあて叶
とねそ力及びす無藤次考きよまきしれて
山筑城よりふもりのふ山突へも又敵よと
とましししちやとる物も取あへて平家小舟
ともよぬなりぬもすううそあ國柳浦へう

まられけりあふよ部とさるるの内意は
らるるしとこつ愈後あつししちやもふ取あ
たれをうまもつぬしと又長門より源氏よ
すしやとししちやとるものことの里あへすあ
まの小船よりしし海よりううひぬと船小
松波元三男左中一將清隆や何本一と船ひ
入の今人よておししき船の成月の表身し
た小舟出せやうてうねとるに船フネしとあう
もれけりちやとをし源氏乃たちよせや
落さまはるるし怪事ありとあよ進かさる細ヒメ

ようくまゝなる道乃こといけりへゆゑもの
つるへまかつてしめしへもつてまかたつて
をとりてまつる小證よを念佛して海よりまつ
みほひたる男女なまかななりやそのひそ
なき長門國と新中一納を知感つる國なり
をを目代を紀伊刑ア大吏を資といふもの
なり平家ありて女子よりいふるより承
大船百名艘然してつりせらるるれし平家
あまよまういふ言國つるまゝつてまゝなる
彼民部を法り所とつて讃岐國に嶋の磯

よ新れやうなる板を乃肉巻や浮取をそま
らをまゝそのほしをあやし乃民屋を皇居
とすまよ及も子を舟を清取とるまのり
大臣汲ら下れ錦お書者ありて遠屋
日くくりに越りやとふらそりさね詮取
鷄首と海中よりうり色波の上れ新文と録
なり時なり月をひさきうりかのみりま
慈心しつて書をあかざるまのまらふ
會をりやゆじ洲崎ふさくすまのしを
嶋根をより磯る小町ら板のをとて表すよん

紙つこまーび白鷺のとほまきふびまぬる
をみくち便衣の旗をあらうりやうりし
子聖存乃遠海はなくを空てもほくしこの世
のうもすうり舟をあくのとつりる晴尚し
たんとくうー翠黛の顔色濃茶の眼うのつ
て糸太望つのがみさなをいへつぐししをい
ちやうあうけいよかふれおやしお母の小
屋乃あー蕙薰物乃あふまよもるあふれ
もーか中くーつやーふまほきても女房を
をけふきぬお思ひよこれ明井れ海をこり

チイニラク

為勢いゆい縁のまゆすもてこ連はくうれ
人とも思ひぬつすさうほくよ鎌倉お兵衛
依頼おのあー証殿の軍乃院蓋をくこさる
清俊を左史生中一原藤定とうさここー十
月四日実東へ下着兵衛依喜ひけくを頼頼
朝武常乃名長長きうよよつてぬぬ証殿
將軍の院蓋をううあうさねもねまをりの
てううけくうさるへまかあまれお没りて
精者なふしとてあまへくそあひひりて
まこれ八幡を為さよたぐせぬふ地類石清

水も岸のりす血床^{クワイラウ}わり橋^{ヒラ}口^コわり池^チ道^{ミチ}十^ト館^{カン}
町^{チヨウ}を^ヲ見^ミる^ルこ^ノら^ニ押^{オシ}院^{イン}蓋^{カサ}を^ヲた^タき^テし^テの^ノ
清^{スミ}取^ケを^ヲう^ケふ^ルと^シ拜^{ヒラキ}ま^リり^テ三^{サン}浦^ポ女^メを^ヲ澄^{スミ}し^テ
う^ケけ^テら^ニま^シふ^ルア^ラし^メの^ノゆ^へを^ハ苗^ネ圃^ポを^マ
う^ケし^テら^ニ弓^{ユミ}矢^ヤ取^ケ三^{サン}浦^ポを^ハ太^{タイ}席^{セキ}を^ハ翻^{ツキ}の^ノ末^{マタ}系^{ケイ}也^{ナリ}
う^ケれ^テう^ケん^ニ父^フ大^{ダイ}か^カも^モ君^{キミ}に^ニた^タり^テは^ハ命^{ノチ}を^ヲも^もて^テ
無^ムな^なれ^レし^テの^ノ新^{シン}明^{メイ}の^ノ英^{エイ}泉^{セン}の^ノ建^{ケン}勝^{ショウ}を^ヲて^テう^ケさ^し
ひ^の多^タ免^{メン}と^シを^ヲさ^しこ^しく^ク候^{コウ}蓋^{カサ}の^ノ汚^{ケガレ}は^ハ恭^{コウ}を^ヲ
亂^{ラン}子^シ二^ニ人^ニ亂^{ラン}お^お十^ト人^トく^くく^く三^{サン}浦^ポか^かを^ヲ亂^{ラン}子^シ
二^ニ人^ニ亂^{ラン}お^お十^ト人^トく^くく^く二人^ニの^ノ亂^{ラン}子^シを

和^ワ田^{テン}と^ト永^{エイ}宗^{ソウ}妻^メ法^{ホウ}本^{ホン}藤^{トウ}田^{テン}席^{セキ}終^{シュウ}免^{メン}なり^{ナリ}亂^{ラン}お^お十^ト
人^ニを^ヲも^もし^テ太^{タイ}お^お十^ト人^トく^くく^く一人^ニは^ハく^く後^ゴを^ヲも^もし^テ
ら^れれ^レ々^々り^リ三^{サン}浦^ポ女^メを^ヲ日^ヒを^ヲり^りの^ノひ^ひた^たく^くま^まし^し
思^シ系^{ケイ}滅^{メツ}は^ハ種^{シュウ}を^ヲし^し足^{ソク}係^{ケイ}左^サ刃^{ニン}切^キる^ルに^ニ女^メ田^{テン}席^{セキ}の^ノ
う^ケら^らま^まら^らふ^ふの^ノ免^{メン}を^ヲ治^チ藤^{トウ}代^{ダイ}弓^{ユミ}脇^{ワキ}を^ヲけ^けさ^さみ^み
甲^{カウ}を^ヲ脱^{ダツ}て^テ衣^イ紐^{ニウ}より^{ヨリ}も^も勝^{ショウ}を^ヲう^うく^く候^{コウ}蓋^{カサ}
清^{スミ}取^ケを^ヲう^うらん^{ラン}と^トも^も左^サ史^シ生^{セイ}中^{チュウ}け^ける^ル只^シ今^{イマ}院^{イン}蓋^{カサ}
う^うけ^けら^らま^まら^らふ^ふと^トも^も誰^{ナニ}人^ニう^うた^ため^めの^ノま^まら^ら
ア^アや^ヤの^ノひ^ひも^もま^まを^ヲ長^{チヤウ}係^{ケイ}依^イ代^{ダイ}依^イの^ノま^まら^らや^ヤ怒^{イラ}れ^れ
々^々ん^ン三^{サン}浦^ポか^かを^ヲな^なれ^れら^らぬ^ぬと^トも^もぢ^ぢを^ヲ三^{サン}浦^ポ

意次系着沈スミとらうおれつられ院着を蘭
菊よ入られたり共束依返キをきく辱くもそ
蘭菊をしとささきつらおもりのとされハ素芝
紙ひくつくみるハ沙金百あ入れたるは
えの練敷リして素芝ハ酒紙すくめく子舟
院次友配繕シを又位一人役送をつやせ馬三
之ひッのトかト一トひトきト小鞍並らと大えれ侍持形
二藤一鶴ト質ト繕トられ紙トもらと蓋トをとつ
らふて入られらと帯ト締トの衣ト二ト便ト小袖ト十ト
衣持にりれてまふけらと紺藍摺ト白布十端

とほめり墨盤トきりて義ト藤トなり次ハ日共
儀依ハ皴へむくふ由外ハ侍らりととも十
六回まきわりきつ外侍トを花子衆等とも
肩をたしハ膝を結トてたえむらと肉侍トを
一門の源氏上座トへ末座トハ大ハ小名衆ハ
つ連らと源氏の座上ハ素芝をす人らり
わつて後敷トおじトふトうト包トをトりトうトらトいト色
里のたぐみトをトしト三ト意トひトこトしトもトをト思ト海トのト墨ト
をトしトてト素ト芝トをトとト人トらトるト汚ト簞トうトのト足トのトを
さト受トてト共ト束ト依ト返トかトらトれトたりト布ト衣トハト立ト烏ト帽ト

子ながらうがたまさきいせいのむらりりり容貞
浸羨^{ニラ}みして言^ゼたふ^{キヨ}なりえり細と一本
述^ニたる^ニ探平亂^イ頼^イの^イ威勢^イも^イたう^イま^イて^イこ^イと^イ
は^イ部^イを^イお^イつ^イその^イ記^イは^イ本^イ者^イ冠^イ者^イ仲^イ十^イ亦^イ茂^イ
人^イ打^イ入^イて^イま^イり^イま^イる^イか^イは^イ友^イが^イ階^イを^イた^イり^イ
さ^イ備^イ小^イ体^イり^イ割^イ困^イを^イさ^イし^イし^イ中^イ系^イ奇^イ怪^イなり^イ又
奥^イ者^イ湯^イの^イ陸^イ奥^イち^イま^イなり^イ依^イ竹^イ冠^イ者^イの^イ常^イ陸^イも
ま^イな^イつ^イて^イ是^イと^イ頼^イ頼^イの^イ下^イ知^イ小^イ路^イり^イす^イつ^イう^イさ
臣^イ討^イを^イつ^イま^イは^イ後^イ意^イ路^イふ^イつ^イま^イり^イと^イ中^イ系^イ奇^イ怪^イ
乞^イや^イり^イて^イ是^イと^イ名^イ簿^イを^イも^イつ^イを^イた^イう^イを^イゆ

つても南^イ河^イち^イ河^イ使^イの^イ方^イて^イう^イへ^イし^イ所^イ上^イけ^イて
や^イう^イく^イ志^イく^イめ^イて^イう^イま^イる^イや^イめ^イて^イい^イ史^イ
大^イ丈^イ直^イ法^イと^イは^イ儀^イを^イ中^イの^イ兵^イ束^イ依^イの^イさ^イ嘆^イて^イ南^イ
時^イ頼^イ頼^イの^イ方^イと^イて^イ各^イれ^イる^イ後^イ思^イひ^イこ^イう^イと^イて^イ
ま^イめ^イも^イか^イさ^イま^イし^イこ^イう^イ存^イま^イめ^イと^イそ^イま^イひ^イ
け^イる^イ柔^イ芝^イや^イう^イく^イと^イ海^イ乃^イ中^イを^イ中^イ系^イ奇^イ怪^イ
あ^イ運^イ留^イあ^イる^イこ^イし^イと^イて^イこ^イう^イめ^イら^イる^イ日^イ又^イ
兵^イ束^イ依^イの^イ皴^イへ^イじ^イう^イ前^イ黄^イ之^イれ^イと^イ入^イ版^イを^イ
一^イあ^イ白^イ池^イと^イう^イ右^イカ^イ一^イや^イり^イ陸^イ藤^イの^イう^イ小^イ野^イを^イ
う^イん^イて^イた^イ小^イ馬^イ十^イ三^イ之^イひ^イう^イる^イ三^イひ^イき^イよ^イく^イ

五つら十二人女子服おきしと並糸小袖大
ゆる袖具よ及つる馬たよと三百むかまへ
わりきつと鎌倉出の着らしも鏡カミの着丹つて
頭まへ着るに十石ほくの巻とて進らる
これいさくさんなるみあつて絶セ行よ到ける
とそやもし子三恭志郎への不^レ院新して地
坪のうらよ畏て笑朱の指をほふたに
里甲ふらときれし法皇ちさふ清感のりたる
こつ^レ汝上人もつとみらるあひのしと進きり
長傳依汝るつうつうゆくしうたせしう南

時らやあのみ播まていれきる本着兼仲
を似もよとよあつととたり笑しあうみあよ
い男よあつたれとと左君もらまひの至
骨ツノさもものりよとと相ほくまれのそをあ
ふ事うさつなうとつりうか二歳よりと母よ
あまらるる信濃國本着といふ山里よ後か
まておししけねとなしうとつるかつとま
は猶國中一弛きまきつといふ人ありたり
本着よまひあをすつあかことわりておつた
里たる越後ホとも猶も汝のつとをぬきい

とひひたれを本尊大まにひらきけし祿ある
人よ對面するうらまじやぬこまの中細き
汲とそこつてつてきひひやひひたれ
しらつてきて對面をまそぬこ海汲とそを
いとそぬこ敵のけやまたまれまじひひ
物よりへとうひひけら中細きぬつて
う只今さる清こと乃おしとアかと言へ
まそなたをもあしらへまそのまそ無極と
つみろやんぬき塩のま草タチあり
とうしくとそいろうのす根井小泳右配イ繕イを

イナロ田舎台子ガウシのまそめくたまさるまほつり
お飯イうらたのうようひほさい三程しやま
草のまらまてまつをらま本尊のあま色に
なり種まてす人うらまきりまそ無極イを食イを
中細き教をあまらま台子れつみまきさた
めささりたれの本尊またれうそ智ひあひう
ろまを仲のニヤラ格イを台子ガウシてゆそやうくと
すくひら國中細きめまてまさいすうあうら
まらんとやまつまけんうらまてめすうら
しやさうをうれたりもまを本尊あかま

暖^{ワカ}て猫^{ネコ}泣^{ナク}を小^コ食^シは^ハりすよまきこゆる猫^{ネコ}お
ろく志^シ持^チひたる^ニ飼^カひ人^{ヒト}とそ^ト費^ヒら^シける中^{ナカ}
油^{アブ}を^シ敵^{トク}を^シやう^ニれ^ニ本^ホ一^{ヒト}も^モろ^クは^ハ奥^{ウチ}あ^ハて
ぬ^レま^ハひ^ハり^スア^ハか^シく^シく^シ一^{ヒト}言^{コト}も^モひ^ハ
つ^クら^シと^シつ^クふ^クめ^レき^クら^シれ^ル故^ユ新^ニ仲^ナは
新^ニく^クら^シる^ニ信^シが^ハ踏^ミた^シふ^クま^ハれ^ル重^シ重^シと^シ
お^ハ仕^シさん^ハあ^ハも^ハあ^ハる^ニア^ハも^ハな^シく^シく^シ係^ケお^ハ布^フ
衣^イと^シる^ニ紫^{ムラサキ}栗^ノ冠^{カウリ}と^シ油^{アブ}の^ウく^ク揚^{ホウ}費^ノの^ノま^ハん
よ^クく^クふ^クま^ハし^クの^ノを^ハか^ハら^シつ^クや^ハ限^カな^シ鐘^{カネ}
と^シつ^クて^ハ若^{ワカ}夫^ツの^ノま^ハし^クを^ハひ^クら^シつ^クら^シ甲^{カウ}の^ノを^ハ結^{ムス}

志^シら^シ馬^{ウマ}の^ノう^ラま^ハら^シる^ニま^ハを^ハに^ハも^ハふ^クま^ハら^シる^ニ
つ^クま^ハり^スま^ハら^シる^ニ車^{クルマ}の^ノこ^ノつ^クま^ハり^スぬ^レ牛^{ウシ}の^ノひ
そ^ハい^ハ鳩^{トビ}の^ノ大^{オホ}尾^ビ泣^{ナク}れ^ル牛^{ウシ}の^ノひ^ハな^ハり^ス車^{クルマ}を^ハう^ラれ
ま^ハら^シる^ニ選^イ相^{マウ}な^ハら^シる^ニの^ノま^ハら^シる^ニを^ハ門^{カド}
出^デら^シる^ニ一^{ヒト}ま^ハら^シる^ニあ^ハて^ハな^シう^ラふ^クな^シら^シる^ニ
よ^クく^クア^ハか^ハう^ラし^クや^ハら^シん^テの^ノハ^ハり^スま^ハら^シる^ニ
車^{クルマ}の^ノ内^{ウチ}の^ノま^ハら^シる^ニあ^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニ
ひ^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニ
あ^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニ
あ^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニま^ハら^シる^ニ

て登まこう〜こ〜いむせあう〜しふ〜
といひけきともらるるをせ車といふうと
心めて不六町うあう〜せかれと井田
鞆をあをせて返付なふとて汚車をしか
やうもせ侍らうやいひきれとあふるよ汚
うししの鼻ハのふとらうとらう女へふらけ
子牛飼ふそよなうなとらうとらうやおもひ
らんろれふ山も新カタとらうものよとらうけのさ
治人と云けきやとらう新カタ〜しとらう
み付てあうられ支度シタや牛ウシあてりつらうのう

ひの波のやうのうとらうけらうとらう汚
取へ事り門あうとらう車もあうとらう
たうとらう〜きまじ京の老れ難色ふ〜
う〜まけるう車もあうとらうとらう後
らうとらうとらう〜らりた場ぬふ町をまん
らうとらうとらうとらうせぬふとらうとらう
本當りのひの車な〜ん〜とらうとらう
とらうとらうとらうとらうとらうとらう
けらうとらうとらうとらうとらうとらう
たうとらうとらうとらうとらうとらう

三ツツハカツ

嶋子ありあゝ山陽道ハヶ國南海為六ヶ國
郡合十口ヶ國を討取けり本曾左馬頭は
申して守てやとくぬ申なりとて西國へ打
多遣ハカす大將軍を矢田判友代義清侍
大將を信濃國信人海野孫平官常行廣を
先とて郡合その勢七ヶ國西國へ發向
す備中國水嶋渡も舟をうり包てハ嶋へ渡
ふらをしとて國十月一日水嶋の渡も小船
一艘出来らる海士舟釣舟のやとらふ所と
そなくして平亂れ本より皇の候乃使の女子

なりとて徳氏乃本の長とも是をみるや
あきとらとらる又百餘艘舟とともをむり
さきして落しきとて平家を予餘艘しきたり
たり大將軍も新中洲之知威副將軍も
お結忠教強なりたり法意敵大善なるを
あきとらふ小國代や所もく小生捕もき
まんをいひとらとて守すや海も乃船を
おそのやとて子家さう乃とも所ふるは
をともあしきか下もびやぬをりれゆえ
の板を引まゝししくわぬとてまゝ舟

うへを斬くうへ源平あふときをほくつ里矢
めしきしてとほまきしうて討ちつををし
た刃てまら或や終ふふりあて刃たさるる
ふものそわり或やひけ終うちりつと海
を飛入るものもわりひけ進ひたつわりをえい
さりまうと源氏のつこの約大羽海野源平四
流行進うと進ぬこ進をみく矢田判友代兼
清やとつぬことかりとて主従七人小船
よりまふあよすくきてうくうひりりり
あまらつめくう幾もまうとああふのう

るをまらうとされを船とも乗あふけく
ともほおろく舟より進もくをよの
と馬れ是を鞍はめひこるほとまをなり
つとひこくとうり来て終登攻ためりく
うれをりあ流くを源氏れつとまを大將軍
をうと進ぬ我うれふとそ流ゆとまを平家
と水嶋のつとさした勝てうと會越人死を
さよはけ進木若たる歌うのうとをすてあ
つとぬことなわとてうれせい一美を終て
兩國へうをうとあうとまあれつとよ

ウナサキ

ひたす備中一國の任人漸む古泉急處をさ
あゆみあそびてありきれともちゆり又月小
國乃たくりひの河運やけふよらんが國
任人愈え次第成澄らるるのくはて生捕小
ころきりれもさうれとさすてよさうれん
うさうを本番改めつうう男をさうなう新
アさふあうすとして才の成氏は頭られてそ
ゆひける人のひんさゆりしを信なりたれん
愈えもねんころふりてなりしを種子つうの
國は因つて李かつうの漢朝へゆらきりし

こころを英國の任人ともある人の
ころころしし雨なりとさういさうれを
いさくもつて風をみききんあくわら
きさやうもつて飢渴よあつあつをいゆら
うやなくむるを終日日本証書り茶をう
すとりふりるよほひはくつのもささく飲
を洞ひ打てつて一夜舊主頭見えやと思ひ
たらりる急處の心のうらうらうらうら
まある河漸む古泉急處をさゆりひけるま
ゆる又月ころ甲斐なをさすをまらま海

いそをてうへを誰をたきとりの思ひまゝを依
つてたきなほ合致とく命をまじつ本當取小
まゝをうれよつたてをえき道徳の志行
仕ゆひ一備中一の瀬尾といふ取をむまの
ま調らき取まていし清道中して終りくを路へ
粟肉老とんとつひけきし倉光三取本當取
よりのり一取中一す本當取とてや不便の
事とも甲こさんなれまことまを母を下て
馬のとさなとをもちてへさ取らとまへし
くくくつ三取取取てませい三十終らつて

瀬尾本當取をいひくして海中國へ地をく
まのちの婦子小本當取を平取乃清取
よひひくくく父の本當取とて能取とつて
まゝとてまてま来の取本ともいひあは
ゆそその勢又十終りてまて父の逆子の不
けらる揚慶の國府てゆふあふらうれよ
まうらつれて下子程まゆ取國三石^{三ツイシ}取
とくまらうらうけく取取まらお取らもの
とく酒をちてま集り終取らりもありたりの
倉光の取母終りまを志ぬあせておらへ

たてと一こよみかろくろりしてきりし袖あり
團を十餘人れ團かむきりしを代官れ團有
おありしをきりてしよよきりしうけ
かりされをのたる道慮しう本尊敵しうい
とふ給しうてきりし死下され平亂し汚志
智ひ下りしをむんくや今度本尊敵しうい
給ふし夫一討りきききやや持落ししし
まし袖お備中一備極三箇國のほししめ
ゆるしつるる相具本流なとをしよ敵のほし
る下りしせてやとみわらしける若者ともを

のたよもよかきまて我を掃の並並しほめ
ひも一我や布の小袖よあつたおりししを
さり後おけくし若山うりかたのふししよ
矢ともむししきりしをひし我もわ
まじりと漸るりりしへ池おけまる部合うれ
環二十多人袖あり團福隆を繩に藤乃さまつし
を城堀おがまんて白二おあつた二丈し湯
けぼりしうい楯しきさ矢念しし送本到て
まら然らうし十餘人れ代官漸尾しうし
てうれ下人のみきて京へしほりし掃塵と

備前の境なる船坂といふ所まで本當没
めりゆひをりはしりくくと申されへ本當没
にくいさりおめを斬て控りつるまはるもの
を身造りてたもつるまはることを安
くゆめ悔きしれれ今井田康中たる
をまやけつる福たか忠とをみゆつすす
者さすくやと申ひしあくはろつるまはる
ゆめ向程の申のくへ子進末先所向てみ作
りんとしをせい三十餘騎て備前國へを
くくふ福隆となくとをたれもさりまはる杖

一杖つるまはるまはる西國道れ一里なり左
たか深田まて馬のめりも及まねそ三十餘
騎の心を先よすくつやも力及びす馬は勇
りく歩をまると井田康をくをて見せれ
く瀬尾右衛をさる矢荒まのつるまはるを
あまきくまはるまはるひなまを助られま
いをてい吾の志もを是とく用意仕て
くくとく揚げめ列はめあまふりて井田
康又崎三郎海野望月源坊なるといふ一
人南寸の無ともはる事なきす甲れ志く

を飲け討船ツボに取らんをとりしつれ引入堀
をうめ成ら左太の浮回より入り入てるのを
さつふむむのひ川とくやと腹もたつ取を
も本一ともさすじつと受りひて推よを或を
若少もをを嫌しととりも入くおのふ叫サシて
せめ入られを漸むう方の共とも助うる者
を早くなくうと取く老そおほうるまをる取
小入てを乃をうたのそ切うる藤乃をまら
の城郭を破られてうおつとや思ひきん
引返さ備わ一國板倉川のもさよカキ撞楯うい

て待のきくらと本井田原やうてはくつとく
も進や漸むうの共とも山うつがうのそ
ひつと矢程のあるほとくうぬきをさられ夫
とひみかツキ出け進しちうう及つす我えうと
そ落部々る漸尾たぐまは三路に討をさ進
板倉川に端よはわて縁ミトふれへ着るゆく
まゆり又月水国うてを乃お生捕よとさう
けり愈更次成澄をすれ成茂を討をてあ
うととや智ひとんと度と又き乃お免よを
つてと生取よとんとて只一踏解おサシ援て進

てはわしひ一町つるま小區付の道をわつおさ
のをとらうみまきあまなうと敵まう一ろを
見まふ地り船と言祭を然たれはを乃をの左
承を極くく川を西へまゝすすり汗中にひり
つゝ待つもいりくくみり次承鞍籠をわし
きく地来り押双じもとんとてとうとおつ
まよをとらぬ太力てまわりうへまかなわ下
小なわころひひわひけりうの河岸は淵乃あり
けりまころひひ入てくくこけく壱水練なり
をこれをも宛免のといまんとてありたれと

水乃産まてくくみけり勝れ刀刃ゆき鑑乃
葉摺り上てけりのも葉ととねましくと三刀
刺て鑑をとらるを此をの太承りりの馬をいふ
換志ふらけきや念えりるふうりきて落ちて
仍婦子小太承宗康わとく女よなりけき世
あふまよ肥大て一町ともえらうらぬ物具
脱すてくあゆめともくまのをゆりまは
をこまきをみまてく十餘町をせらうけり
尾太承良およひけりるを日暮子美の敵よ
うふて軍するを軍方とれて是ゆらうふ

を小右衛門をよめてゆきをまよや一向の
晴うてまゝぬそと鷹の軍は命のこて平家
の流りへ集りたりとも兼康や六十の
まつてゆく程のうや思ふてたゞ一人を
子をよめてまゝおれ集りくらんなど
同齡ともよしけん事うは折しけ事と
いひぬれぬおさうくもさう唯一雨とい
りおもなくせ給へと申はらるるあくゆりの
しとさうせ給へて又あて返す業いこと
見小大席宗席を是うんづらよ離てあせつと

のたる上瀬尾右衛門まゝらうと死てたつと太
小席の身証をて世と一雨てりのうをたう
ひとねりふたうこま色返りまらるるせりの
とつひけまし小右衛門海をばくくとなう
つくたといひあのもらう見懸量よりくも自
言証はゆともつま故は命をこへう一なり
幸うちんことと立違花やゆらんすらん
とうしくせう瑞瑞とつひけまとも思ひ
切らんうぬつめて休居らうらるる取よ今井
巨席道平又十路りうと親親を合まて延怒た

王漸王太師村のありしころいすりの矢張搦
河め引けぬおなごふり多死生をたゞるを急場
よ款ハ渡村にとも後立ちを援てふつ小
太師の頭少つと打落してさ中へ怒入
壁搦撲ふ海もて十文おなご小我ひつこ
よあまごをひけぬお打死しやきり康おも
まよらつておからぬ我ひけらういごを負て
生取よころきくまされわー一日匿るまそ
死にたりそお三人のころひをい海中國警サキの
森よを掛ら上げら本着没わつつま建剛れ者

ムロヤハカツセシ

やそふら會を助けくみくともそ意ひくらる
祖よ本着を備中一國百おまサキをて勢揃しや
ハ嶋へ返よよとんととをる都の留るより
そのまらとけら梅口次康兼光兩國へ使若
張をて没のわらき終まぬまお十康兼人没
しそ院のまらんしややうく小鏡養きく
まゆなれ兩國の軍をい替ヒナシクくしつをぬて
いろふのふらをぬんとつひされもあつても
とそ我をい小慈で絶上る十康兼人行最本
着舟中一遠ふてあつらるんとやたつれ

とんろれせいひる百多騎丹波路子うけけ
播磨國へ落下ふ本當を播磨國をうけ部へ
りる平氣やまろうじじとて大將軍よを新
中御之氣盛つた三位中御重御つ侍大將よ
を新中一以而兵束感績上総兵束忠光
兵七兵束忠清伊賀平由左衛門家長をうけ
とて部合そのせい二美能結播磨國を推
まるとま山よ件をとら十永能人新平氣
とつとさうして子そに中一力をまきんともや
おもひらんろれ播五百多騎ま山をうけ

られけま平氣を件を五川ふらるは伊賀平
由左衛門家長二子多騎て一件を叩くじ部
中以兵束感績之十能結て二件を圓其上
総兵束忠光兵七兵束忠清二子多騎三
件を望むた三位中將を御つ三子能結て四
らん能叩くのまふ新中御之氣盛つ一美能
結て兵束よひの包結つる上之一件伊賀平由
左衛門家長哲そのひ志らふ新よもてな
て中一を叩くそを五一きる二陣新中一以而
兵束きもあまうそを五一け子三件上総五兵

兵衛越七兵衛ともよあきてそとをくまら
口仲中三位中将を御邸もゆーうあきてそ
入られきり先陣より後陣まで越て物米志
らうとたれ源氏を中一よりとらあつて我うけ
とら来とそすくみ々る十郎花人初最あそ
あうつこま小きうととや思これきん而も好
らひ命も朽ますあくを義信と防我小初
中一油を只押双てそのやそのや下知き
まそれととあとう十郎花人よを双々く
とむ成者一誇もあうととら新中油をれむ

ねやたのまねらうけり紀い左邊門紀い衆
門紀九郎たといふ一人苗子れ共ともみふ
うこまて十郎花人よ討ととまの世誇りる
よ討おこまて七誇大略をひひ方やみふ
敵がわれの勢へ一やをむほくねとも思ひ
切て一亦打破てう出たりける播磨国言砂
らうと再よきて和泉國吹飯浦へ押まると河
内國長野城ふたてりり多平亂を室山水嶋
二箇夜のつくさた勝てらうつとくを
つえりもまは京中よを源氏の強みりく

ツミハラ

て在る所より入る者ありて其義に暢乃許飲
とていふ事。其回を断て下とさる一人の意
をうらりりきて物をとるに路次よもてあふ物
候うとひとるに衣裳をとり候とる事家れ部よ
おしせしほとをたたくたおとるはとてお
ろろ〜のつ〜のつ〜なり衣裳をとり候とる事
をたけの〜物類平敵不徳成つ包かりた
りともう人甲けり法皇より本尊左馬頭代許
る振替務めらと候下さる侍使を壹時^{イキ}時^キの
親^{チカ}の子小寺彼判友の恭といふ者なりと下

小寺と〜教れ上りてあり候は候人
候くみ判官とさう甲けり本尊表面〜まら
候也申を中さる候わとの酒被判友と云
る百の人よこれ〜の〜また〜の
とら問らとけり物悉也事よ及びすいり
候兼て兼仲たとの者よ〜やを返討を
させ候へ只と物敵とたり候なんすと申
け違は候とさる候と〜の候と〜候
られす〜山代座主とる者吏と候られ
山と井とれ魚僧とをそりてさけり候

上人乃のさきたる邊とつよみりへツフテ磔
地ツチつふひかなツチ冠光愿さてや乞食法師
ともなりきつと本名た馬頭院の清氣文の
うならりとまじりししを本名よほやく
ふみ幾曲の老とも皆本名を背て後方へ下
つ流又信濃師代村上判友代られもさるを
うむつて流直へありきりし井田取平けさ
是ころ以外乃流大志一もてくへさきとしと
て十善乃君小ひのひつをてつりつりつ
台職りへさたけ甲を脱り乃流うをもちい

て諸人よつりせ流ふつともやゆらんちや
これ本名たさよおてつ建信流を野一町
小見台田の軍よつりしつを水田をてを流
波山王坂鱈さう藤魚兩國をてを福隆寺流
自藤乃をまらまけ城郷をさつりつ一たも
款よりろをてんをて流十善の君よてまら
らきぬとも甲をてゆふりけ流をさつりつ
人ホウもや専らうとありまらこれだつてし都乃
も流してあつてさるものる一たけり
てのうさるつあつていづくさある田ともあ

ホウ
ツフ
ツチ

らきて下とさし丹をわれりし法皇は
との御方ふつとやうやあると松尾をなま
移し冠者取とも行はしむるに付て町へ入
るととらんをたしむるに付て町へ入
り下まこり河原へもあつてもさう
めつりのさへは是を被判友の函書と申す
そそのはくみめ打破て控へと度と申す仲の
家後乃軍をたしむるに付て町へ入
船がふりまじりする所をわたり軍をさし
そのともとておかたしむるに付て町へ入

着下て終ふ七子終つてあつては義仲のゆく
され吉備なれつて七子もふちえ樋口次
弟兼光二十餘歳で新徳野の本へ搦手も差
けつりすのこり六子や吾のわたる見する
桑里如路より河原へ出て七条のりつてひ
とけよなれとお家をとるのめつり立きつと
終つて望志郎と申す妻の衆とてはあつと
つりつてさう十一月十九日入船なり院法
師法住も没るも年長二萬餘人あつてもり
つりつてさうつり本尊法住寺殿に西の

口へをうらをてみる違を被判官物番をい
見さの初事ぬて汚取の西代はい垣の上ハ
の不里めつりけて立らまきらる赤地代後の
遊遊は甲つらとそまらまけら甲まを口夫を
ういてそをうらまらまらぬくまを辨ホを持
ゆいもまを金剛ニカウシイ終をもつて打揃く河ら
を森物もつりたりこつ波上人を風情なり
物番まをま物けぬらとそまらまらぬら
ともやま大番ぬをあまきくるるを並名を向
てうらまらぬへつきうらま本も忽タテニチは花う記棄

かり悪鬼ヤク神もまらうひま未代とつふを
つりてう十善の君まひひまをてうを
まひまをぬらぬけへかまぬたん矢を都ホク
て方まぬらふしぬらん左刀を並ホク而方ぬ
切しなとぬくしつたりぬら本番ぬぬい
らをうやてらさをとらとそぬまけらま
ま極口次赤魚え二子館跡新懸聖代方うら
ときらぬをそのぬらまけらと井口赤魚平
引目の中は火をうけては値る波の汚取
代ホク採小村たてらまけぬらまらう勢を

もけし〜^三猛火をこみ^三燃^三上^三て^三煙^三立^三し^三み^三り^三こ
て^三望^三つ^三る^三こ^三の^三形^三事^三の^三悉^三を^三人^三よ^三る^三を^三先^三よ^三ら^三ら
し^三き^三り^三初^三末^三の^三た^三け^三ら^三う^三へ^三を^三二^三義^三名^三人^三の^三
無^三とも^三我^三さ^三記^三し^三と^三そ^三落^三初^三ら^三る^三あ^三ら^三ま^三し^三よ^三あ
つ^三て^三あ^三し^三つ^三て^三ら^三お^三老^三を^三矢^三を^三志^三す^三を^三矢^三と^三ら^三
者^三を^三ら^三を^三志^三す^三或^三を^三長^三刀^三あ^三の^三さ^三ま^三お^三け^三ぬ
て^三我^三是^三け^三ふ^三費^三を^三者^三を^三あ^三り^三我^三を^三ら^三の^三し^三を^三福
よ^三の^三き^三て^三し^三も^三し^三つ^三さ^三を^三と^三て^三く^三に^三く^三る^三もの^三を^三
つ^三り^三七^三條^三う^三す^三志^三を^三し^三持^三津^三國^三保^三氏^三の^三町^三の^三
た^三ら^三し^三け^三ら^三う^三佐^三津^三取^三ら^三う^三と^三落^三人^三あ^三ら^三う^三を^三用^三意^三志

て^三み^三ふ^三打^三解^三こ^三も^三下^三知^三き^三し^三れ^三ら^三し^三け^三進^三し^三を^三
地^三の^三老^三と^三も^三や^三祢^三の^三は^三指^三を^三つ^三ふ^三な^三く^三へ^三を^三し^三
る^三れ^三石^三を^三と^三る^三あ^三つ^三め^三て^三待^三者^三ら^三は^三延^三し^三持^三津
國^三保^三氏^三の^三落^三ける^三跡^三を^三く^三め^三し^三や^三落^三人^三ら^三り^三と
て^三石^三を^三ひ^三ら^三ひ^三り^三も^三あ^三ら^三う^三ら^三け^三進^三し^三こ^三進^三
を^三院^三の^三て^三あ^三ふ^三ら^三あ^三や^三ま^三ら^三す^三お^三と^三り^三ひ^三け
ま^三と^三も^三さ^三お^三し^三し^三を^三を^三院^三進^三て^三あ^三る^三お^三た^三く^三打
解^三を^三く^三し^三を^三討^三け^三し^三も^三我^三を^三歎^三う^三ら^三ま^三し^三ま
我^三を^三勝^三う^三ら^三お^三ら^三れて^三馬^三ら^三り^三落^三し^三ふ^三く^三お
ら^三る^三老^三も^三あ^三り^三我^三を^三打^三こ^三ら^三う^三と^三落^三く^三老^三も^三お^三が

うらまはりハ糸の末を山僧其の圓光らうと
けつりの死をそののを討死ししは遠な心多
落うゆく主^ミ水^ミ正^ミ親^ミ業^ミ為^ミ善^ミ人^ミ猶^ミ衣^ミ乃^ミ下^ミり
前^ミ黄^ミ城^ミ人^ミ服^ミ善^ミを^ミ月^ミ毛^ミか^ミり^ミ馬^ミ子^ミ家^ミて^ミ河^ミ原^ミ
道^ミ上^ミり^ミは^ミ落^ミり^ミを^ミと^ミ升^ミ口^ミ糸^ミ道^ミ中^ミを^ミ行^ミり
つらつひつとくしや新^ミ代^ミほ^ミひ^ミを^ミし^ミや^ミう^ミけ^ミし
と討^ミて^ミる^ミり^ミり^ミ例^ミは^ミ討^ミ死^ミを^ミ清^ミ大^ミ外^ミ紀^ミ於^ミ柔^ミ
の^ミ子^ミな^ミり^ミま^ミり^ミ明^ミ隆^ミ道^ミ人^ミ情^ミ士^ミ甲^ミ冑^ミ就^ミよ^ミろ^ミふ
ことあられ始とる承る去禮よ本曾就るむい
ては皇へありとる信濃源茂村上三原判友

代もうし^ミ連^ミぬ^ミを^ミ江^ミ中^ミ将^ミる^ミ清^ミ越^ミ前^ミ少^ミ将^ミ信^ミ行^ミ
も打^ミと^ミろ^ミさ^ミ連^ミて^ミ頭^ミと^ミ連^ミぬ^ミ伯^ミ耆^ミと^ミ光^ミ鑑^ミ子^ミ
息^ミと^ミう^ミま^ミ人^ミ判^ミ友^ミ光^ミ長^ミも^ミ父^ミ子^ミた^ミり^ミう^ミり^ミろ^ミろ^ミ
さ^ミ連^ミぬ^ミ又^ミ按^ミ察^ミ大^ミ畑^ミ之^ミ質^ミ本^ミ心^ミの^ミ孫^ミ播^ミ磨^ミ少^ミ将^ミ
雅^ミ本^ミ之^ミ鐘^ミ小^ミ立^ミ烏^ミ帽子^ミて^ミ軍^ミ力^ミ件^ミへ^ミ出^ミら^ミれた^ミ
里^ミけ^ミろ^ミの^ミ極^ミ口^ミ次^ミ麻^ミの^ミ白^ミ小^ミの^ミく^ミ清^ミて^ミ生^ミ捕^ミ小^ミ
ころ^ミき^ミ連^ミた^ミれ^ミる^ミ産^ミ主^ミ明^ミ雲^ミ大^ミ伴^ミ正^ミと^ミ長^ミ
吏^ミ必^ミ度^ミ法^ミ親^ミを^ミ清^ミ取^ミよ^ミ集^ミり^ミ終^ミら^ミを^ミあ^ミひ^ミた^ミ
り^ミろ^ミろ^ミ思^ミ燈^ミ既^ミに^ミ押^ミり^ミも^ミあ^ミれ^ミを^ミ清^ミる^ミろ^ミ
ろ^ミて^ミい^ミろ^ミと^ミか^ミさ^ミせ^ミぬ^ミろ^ミを^ミ成^ミ土^ミ共^ミお^ミと^ミ

よ討をり明言大僧正秀澄法親王も討るよ
里討地をさきて討るひとられう受ぬなり
法皇を討興より〜地取へ討率なる武士
ともあくる討をり豊後守将宗長本蘭地れ
並兼よちつて之りて供養さる進らるる
の是を復らるて〜きのみそあやまち侍る
なと申さ進らるるれへ武士とも皆馬より下
て畏るなにもあつて討為りたりれも信濃
國住人矢嶋守能経とる家申とやうて討
興よ自然下りてて又糸由亮へ入をてまひ

し是も護志をふ豊後國司三位頼賢スケも討
取よ下りしよふり〜進たるりりり足輕す
る〜然をれやいり〜河原へ逃ニゲからる
士の下部ともよイニキラ衣裳ニキラ留るれとられてま
片のまゝた〜進らるる法を十一月十九日れ
物なれを河原乃風さ〜るを〜り〜り
免三位のび〜と頼兼は橋カハラ姓ニキライの申一團ダン法
師れあつる兵の軍みんとてお〜るま〜る
位のも〜りお〜た〜れ〜るをみ〜るれ法
ま〜とて急さ〜り〜里より法法師を白小袖

二よふもをまゝうまのうさうし小神
を脱てまをまきう一をぬりてなまのき
ふらふ一うさうらうとうけがよわううふに
て帯もきすう一ろれ神はうをみえう
うまけの白衣なる法師を供ようてお
けううさううやううまもゆを給てあう
こまくみたちやうらひの連をうの鼠を是
をなふまわく看取そとくひ給へもみる人
をさういいてまゝいあへるままを池よ
をうう包てめされたりけうの成土とも志

さらよ夫をまゝをせられ七条の儀信傳記
伊ち教え清再よいらとまきけうかこまを肉
うままゝをぬふうあやまら侍るなと申
さ連たれ武土とも皆馬うら下て畏るやう
て深院教へめ考なりなる初奉の儀式は
まゝさ申も申とてろりか了院方おしひ
けうを江島仲兼や信直と教れ西の門頭か
ためてあを足取よ江原氏山本冠者兼高
親統をうもまて地来りつふをのくをたま
けうしりんとうて軍を志給ふそ法奉を初

半と地へなりぬとくろ殿れとつひに
あつてても勢ふ十端つる大段れ中へ
入一ちうち破てそとにまきまき
子あふふふい流のちへは河内日下堂
か賢房とつふは師者あり月毛なるの
のこもれうまらまげらあめをあふ
まよのうこもうてあつた下川へとも存
以つすとつひにけまは極人あらまきふ
系つゆよとして粟毛ならじふれまき白
すのつと替て根井小孫たう二百騎つて

ひのちうまは河内殿の段れ中へとも入あふ
ま我ひうこもてい流の五端あうこまぬが
賢坊を我るのひのひなりとてまらま系
つるこもまきとも運やあまらうこも
はあよりかれまきりあは極人乃極子
ま信濃次房極人仲頼とつふあつて粟毛
ふじふれまき白のこもまきまき
はきて下人あつたあつた極人乃
るとみまを極目らさん山まやうこま
まらまらう死なま一ちて死るんとら

まづうらうとの巻れ中へ入らうみはらう河
原さうのせいで中へさういづをのみひけるな
まけるもやうてあれ巻れ中よりおきては
と申されも次飛人海をけしと流い
て妻子れりへ花後乃ありさ海ひひける
さう一跨河原ののせいの中へうき
入籠少んりうとまのりうと畜あうとあまう
教初親王は八代れ後信濃守仲主の次男
信乃公麻老人仲頼といふ者なり生ま女七
つとと思らんらんくもあや見糸をんとく

聖徳撰う海も多し又さうりもあつるに然下
りうと我ひくうり款あまう討まへけるよ討
死してさうと徳飛人二邊をさうりぬらと兄
の河内守仲頼打くしてまは三隣南をさう
て流りまらうの掃ぬ没の都をさう軍よむらま
さうせぬてさ治へ流かありけるふ本幡山よ
て追付なり馬よりさうらして畏る何れさうと流
尋ありたれを仲兼仲頼となのりうと水國
の函カク徒トおらなとたげうらるるさうと流感
をやくく汝お流流よりんと流れぬあて

子治ハ葛城没^{ツケ}夫々をく^ツ王^ツ所^ツも^ツ下^ツり^ツせ^ツてそ
 進^ツり^ツ上^ツけ^ツん^ツと^ツ河^ツ内^ツ国^ツへ^ツ落^ツけ^ツり^ツて
 子女^ツ日^ツ本^ツ者^ツを^ツ馬^ツ頭^ツ兼^ツ仲^ツ七^ツ条^ツが^ツつ^ツり^ツて^ツ打^ツ互^ツ
 て^ツ所^ツも^ツさ^ツら^ツ取^ツの^ツさ^ツひ^ツも^ツ少^ツな^ツ然^ツら^ツう^ツて^ツ
 去^ツる^ツつ^ツて^ツ進^ツし^ツ七^ツ百^ツ世^ツ餘^ツ人^ツが^ツり^ツて^ツ中^ツに^ツこ
 の^ツ君^ツ主^ツ明^ツ書^ツ大^ツ僧^ツ正^ツと^ツ長^ツ史^ツ香^ツ慶^ツ法^ツ親^ツ王^ツ乃^ツ浮
 頭^ツも^ツの^ツく^ツら^ツを^ツめ^ツひ^ツたり^ツ先^ツを^ツつ^ツる^ツ人^ツ海^ツを^ツ流
 り^ツと^ツつ^ツふ^ツこと^ツな^ツし^ツ本^ツ者^ツう^ツれ^ツ發^ツ七^ツ子^ツ餘^ツ務
 馬^ツ頭^ツを^ツ乘^ツへ^ツひ^ツを^ツも^ツひ^ツく^ツて^ツ大^ツ地^ツも^ツゆ^ツる
 其^ツの^ツり^ツと^ツら^ツさ^ツさ^ツら^ツう^ツて^ツ今^ツ夜^ツけ^ツく^ツ王^ツの^ツ中^ツ

又^ツさ^ツら^ツれ^ツあ^ツつ^ツて^ツ但^ツ是^ツを^ツ疑^ツひ^ツれ^ツと^ツさ^ツら^ツせ^ツて^ツ安
 し^ツく^ツさ^ツる^ツ禮^ツ小^ツ故^ツが^ツ細^ツき^ツ入^ツき^ツ信^ツ而^ツ乃^ツ子^ツ息^ツ事
 お^ツ長^ツ憲^ツ法^ツ皇^ツ乃^ツつ^ツて^ツき^ツの^ツふ^ツ子^ツ乘^ツ肉^ツ露^ツへ^ツ乘^ツて
 門^ツの^ツり^ツと^ツ乘^ツら^ツふ^ツと^ツも^ツ禮^ツを^ツ請^ツの^ツ者^ツと^ツも^ツ教^ツ_元
 所^ツと^ツ力^ツ及^ツて^ツ或^ツ小^ツ屋^ツに^ツ立^ツ入^ツ依^ツり^ツ發^ツす^ツる^ツに
 ろ^ツく^ツ足^ツ染^ツ乃^ツ衣^ツ袴^ツを^ツし^ツあ^ツめ^ツう^ツへ^ツる^ツな^ツふ^ツの^ツや
 新^ツし^ツの^ツる^ツつ^ツて^ツあ^ツつ^ツれ^ツふ^ツと^ツま^ツへ^ツる^ツを^ツ河^ツ内^ツへ^ツ
 乘^ツる^ツに^ツ河^ツ内^ツへ^ツ乘^ツて^ツ上^ツる^ツた^ツま^ツの^ツふ^ツ人^ツと
 の^ツこと^ツ一^ツと^ツ子^ツ甲^ツら^ツと^ツた^ツれ^ツし^ツ法^ツ皇^ツの^ツ書^ツを^ツ此^ツ
 業^ツ乃^ツ死^ツと^ツ人^ツま^ツも^ツの^ツと^ツを^ツ露^ツも^ツ思^ツ食^ツの^ツう^ツと^ツり

志物をと交やたぐ我りのりもなかりるつるま
所る浮命よりし里ころみころとて法有
たきさあへう安終りすお美白松波に婚夫
取をを松波の奪子をかなる本曾流子亦お
のりあつてのそ辨定を押兼伸一夫の君より
ひのひふつをて軍よりうら勝ぬまよや
なうまう法皇よりやなうまう法皇よりなう
と思へとも法師にならんさ行つてつるる
志主よおらよとさくやを頼よねんも
ゆるふらぬよりくさいらも美白母おらう

とつひげきをよ書よえきうまらうけりる大
吏房免明美白よを藤原氏よりなうをぬん
敵を源氏てまらをねんをうまらうの
ひのまうけきとそりたるあつてはの
法殿^{合ヤ}刻^{合ヤ}苗よ押なつて丹波國をそ新^{合ヤ}行^{合ヤ}け
子院の浮出あわれも法皇よりまよのいゆる
浮元服なまほとを童^{トウ}新^{シン}をてましくなるを
まうさうけりるさうたてけき日サ三日三
條中一ゆえのあつて下四十九人れ友藏を
とくめて延終をう平亂れ時を四十三人

さうやうのつれなきしうあれを三十九人
なれと申されぬゆゑに子に於てはさうさう
やと小鍾舎のあはれを依頼お本名の振替
請めんとて金才蒲冠老頼頼九席冠老頼
子六美名請をわひうてさうのなきさ
けりか都より軍か来ては所内をみかやふ
けりひと下さうをさうとがわさうさう
しうを左になう上しつとさうさうも
明しめて尾張國藤田大郡司の許におつ
けりよ世中福つんとて小面よりひけるま

肉判友オネの頼田キトモ左衛門尉成重法園へ地
下里よりウツタひくとも中々れへ九席請曹司を
肉判友の笑来つと下らるつてはそを故
を子細存をぬ使をうし同路く町名審の
のこさうとまへしと判笑来へ地さうさ軍
小不キ流皆落う地打さうし子息又肉取
乙美キの生年十とるならさうさう一人
さうさうを日小讀て鍾舎へさうを下里
さうさうへさうさうをさうさうさうさう
判友のさうさうさうさうさうさうさう

有り高僧を招きをも失ふひけり事らう也と
之幸甚なり是をわづらひて事を終らうと
ねて法大事が毒いなんともあるをもつて部
を甲さき進らうとけ進を朝番のうや陳さん
とて教頭日と進てうううへもせ下子鑑
念殿しや法小目か見えそめひらひかき
うやわらまんと日とと無兼佐の皃へ向小
終り面目なくして又うやこへ向うのぼると
うらうや縮むれなる所を食うるも生け
りうと終らうとさきこころうまほくと本番致

兩國へ使者を左てつうまよら皆終へひと
川に成て東國をわづらひて進つてさき進た
りまれば大層なるうらうと進たれとも平
大油を新中一油をささうを末までゆや
之を仲よかうううれていつくらの部への不
らを招ふつうか十善帝王三種神志を帯て
まうとを招つて甲を脱弓の強頭とつくと
是へ諸人小善進と伴うへしやPさ進たれ
大層なるれやうを法也とあつてうとも本
番用をう寸書教入る故に皃を本番派ゆへ

て清盛を悪行人多かりうとも希代の善
招を志すふれしや世をもをこしうか
名後まを保た^{タキ}りうなり悪行りうしてを誅た
もつ事へなさまものをさせぬゆへおうて推
あらざるんこれ信達ともこれゆゑをてまか
りし原もまじしひこすもこれわくをひての指
なれとも志こしひをて國友志するんを乃
友達をみかゆりしをふ松政の清子師範師
その成をいまこ中御之中將をましく
まらる本當のちうつひよ大臣指政よなり

をらゆりし大臣のさうりけつをを法乃
徳大寺政の由大臣をましくけりて
つをて大臣指政ふなりをらゆりし人の口
なれや新指政をい信大臣とさうりける日
十二月十日は皇をいふ系由表紙出なり
大徳大臣成忠の若下六条西洞院へ法華を
志をかやりてその日歳末に法修法始らる
日十三日除目^チに^モおもれて本當のちう
ひよんて人友か階ともなりしあまおなり
をいせり平家を西國より兵束依を東國より

本巻をこゝやこゝよりお出さるゝお儀候儀の
間王莽ミヤウのよをお出さるゝ十八日迄おたゞたゞ
うゝゝゝ一王ミヤウのきこゝへ皆因トキたきおおが
やあははつ個物をとまらぬ王ミヤウのきこゝのきこゝ
を乃初ハツも京中へ上下たぐが氷の個
魚イサこゝへお出さるゝてお出さるゝも三
日ヒトなりお出さるゝ
香島福候巻中ハ



